

プラスチックモデル

静岡市は現在、全国一のプラスチックモデル産地となっています。

この特性を活かし、本市を全国にPRしていくため、プラスチックモデルを中心とした「ホビー」を戦略資源の一つに定め、平成19年度からシティセールス活動を推進しています。

静岡におけるプラスチックモデル産業は、当地特産のヒノキ棒材を利用し、木工指物の技術によって「木製教材模型」が誕生したことから始まります。

昭和7年(1932)に青島飛行機研究所(現 株式会社青島文化教材社)から初めて木製の模型飛行機が発売されました。中でもゴム動力で空を飛ぶ「ライトプレーン」は学校教材として国の指定を受け、静岡の模型産業の基盤作りに貢献しました。

第二次世界大戦後、GHQから模型を含む一切の航空機関連の設計、製造などが禁止されたことで、青島飛行機研究所から名を改めた青島文化教材研究所では軍用小型四駆車や風力計などの木製教材を製作していました。長谷川製作所(現 株式会社ハセガワ)では木製小型四駆車、田宮商事(現 株式会社タミヤ)では乾電池とモーターを使った木製中型戦車をヒットさせて木製模型産業として軌道に乗せました。

昭和30年(1955)前後にプラスチックモデルがアメリカから日本に持ち込まれました。今までの木製模型と違って、プラスチック製の模型は精密で、簡単に作ることができたため、手軽で安価な国産プラスチックモデルが発売されると、徐々に木製模型の売り上げは落ちて、プラスチックモデルが一般に普及し始めました。そのため木製模型製作者は、木材からプラスチック素材へと模型材料を転換していったのです。

プラスチックモデルへと転換していったメーカーに、タミヤ、ハセガワ、フジミ模型、青島文化教材社、今はなくなってしまいましたが、イマイなどがあります。

静岡のメーカーは、昭和30年(1955)7月14日に「静岡模型教材協同組合」を結成し、昭和34年(1959)から同組合主催による見本市を開催し、昭和37年(1962)に模型船舶見本市から静岡プラスチックモデル見本市と改称してプラスチックモデル中心の見本市を開催しました。

以来プラスチックモデルといえば「静岡」と言われるようになり、業界最大の見本市は、首都圏ではなく、「静岡」で行われるようになりました。

静岡のプラスチックモデル業界の黎明期を、昭和14年(1939)から模型業界に関わり、日本プラモデル拡大期に小売商として活躍・貢献した井田博著の「日本プラモデル興亡史」から紹介します。

プラモデルは1936年にイギリスで開発されたのが最初といわれています。このプラモデルが第二次大戦後アメリカでブームになります。飛行機中心に商品開発を行うメーカーが誕生し、ついで自動車、軍艦も作られました。戦後、プラモデルが駐留軍によって日本に持ち込まれました。

まだプラモデルはとても高価であり、子どもたちが買うことのできる代物ではありません。やはり、子どもたちがプラモデルを手にするのには、国産のキットの登場を待たねばなりませんでした。

そして、それは昭和 33 年に訪れます。国産初のプラモデルを開発したのは、東京浅草のマルサン商店でした。マルサンは戦後間もないころ、主にセルロイド玩具と光学玩具、後にブリキ玩具等を扱い、メイド・イン・ジャパンとしてアメリカに輸出されていたといえます。

日本製の玩具は、値段が安く、出来も良い、安全性も高いということで、戦前から海外で高い評価を受けていました。ところが、昭和 29 年 12 月、ニューヨーク市消防局が「日本のセルロイド製玩具は発火性が高く、危険である」と声明したことから、セルロイド製品の撤去が国内外を問わず進みました。日本の玩具メーカーは、セルロイドに代わる材質を開発せざるを得なかったのです。そのひとつが、プラスチックであり、もうひとつが後に怪獣人形で爆発の人気を博すソフトビニールでした。マルサンはこのふたつの素材について、パイオニア的存在であったといえます。

試行錯誤の末マルサンの第一号となるプラモデルができ、昭和33年12月クリスマス商戦に間に合う形で、次の4銘柄を発売します。

7001	SSN-571原子力潜水艦ノーチラス	250 円
7002	ダットサン1000セダン	350 円
7003	PT212哨戒水雷艇	320 円
7004	ボーイングB-47ストラトジェット	120 円

このうちダットサンは和工というメーカーが作製したもので、マルサンが一般販売したといわれます。そのほかは、すべてアメリカのメーカーのコピー商品でした。当時は、設計、木型の製作等全く想像のつかない時代でしたから、コピー商品を作るのにも、卓越した想像力、技術力、資金力が必要だったといえます。和工をはじめ関西にも製造業者があったようですが、全国規模で流通経路に乗せ、プラモデルを認知させたのはまちがいなく「マルサン」でした。

ところが、これだけの開発期間と資本を投下して作られたプラモデルでしたが、当初の評判は芳しいものではありませんでした。プラモデルが生まれたのと同時期に、週間少年漫画雑誌や昭和33年に日清のチキンラーメンが発売になり、3分でラーメンが出来る時代に「時間のかかるプラモデル」が万人ウケするののかといった意見もあがりました。

苦戦する販売の中で、マルサンが思いついたのがテレビでの宣伝です。テレビ放送は、昭和 28 年から始まっていて、当時では全国で 200 万台の普及がありました。開局したばかりのフジテレビの日曜午前十時の枠に「陸と海と空」というテレビ番組を 34 年 6 月から放映しました。時間枠の前半は、トーク番組で、プラモデルとは関係のないおしゃべりを、後半に一つのキットを取り上げて、その工作のポイントや楽しみを説明するものでした。すべて生放送で、VTRも残っていません。幻の番組といわれています。

テレビ放映の影響によって、伸び悩みが嘘のように、急カーブを描いて増え、商品が足りなくなる事態も起こりました。

ニチモというメーカーの前身は、日本模型飛行機工業といい、台東区蔵前にありました。模型飛行機を製造してアメリカに輸出していました。ニチモのライトプレーンはよく飛ぶと評判で、昭和 30 年代初め通信機器メーカー（東通工）とタイアップしてヘリコプター番組の中で模型飛行機が登場し宣伝活動をしていました。ちなみに東通工は後のソニーのことです。

そのニチモがプラモデルを開発していた時期はマルサンと全く重なると思われそうですが、わずかに二ヶ月の違いが、ニチモから「日本初の」という冠を奪い去ってしまいました。

「どうせ作るなら動くものにしたい」という強い思いから、自動浮沈式というユニークな仕組みをもつ「伊号潜水艦」がニチモから発売されました。続いてモーターライズされた「戦艦大和」を発売します。

放映の始まった翌年の昭和 35 年、それまで様子を窺っていた他の玩具メーカー、模型メーカーもマルサン、ニチモの成功に刺戟されて、続々とプラモデルに参入してきます。三京、三和といった新興の低価格商品の登場もありました。

昭和 23 年、清水で模型教材と模型飛行機の販売店として創業したのが「イマイ」です。昭和 34 年に今井科学となりました。このイマイがプラモデル「鉄人28号」を作り、モーター内蔵で、足の下のピンを駆動させて歩くという仕掛けです。

イマイは、プラモデルを作る前は、木製キットで「東京タワー」を作って評判になっていました。イマイの名を高めたのはこの「鉄人28号」でした。そして昭和 40 年代の大ヒット「サンダーバード」シリーズへとつながります。

昭和 35 年に田宮模型(現タミヤ)が、参入します。現社長の田宮俊作氏の「田宮模型の仕事」に当時の模様が生き活きと描かれています。

初代社長田宮義雄氏は、昭和 21 年製材業を営む田宮商事を設立、22 年から木製木工部門を立ち上げました。動くメカをもった木製模型のなかったころ、一早くモーターライズに挑み、マブチモーターを使った「動く」模型戦車を作り上げ、大変な評判を呼び、同時にモーターで動く艦船模型も作り、昭和 30 年代にはタミヤは木製模型のパイオニアとして高い評価を受けていました。

ところが、アメリカからプラモデルが入ってきました。そのときの衝撃を、「再びアメリカから爆弾が落ちてきた」ようだったと述懐しています。実際にプラモデルを手にとってみると、そのディテールの精密さ、組み立てやすさは木製模型の太刀打ちできるものではない。泣く泣くタミヤは木製模型からプラモデルへの転換を余儀なくされました。

タミヤのプラモデル第一号は、1/800 の戦艦大和、昭和 35 年夏発売。設計は焼津で理髪店を営んでいた四之宮初次氏、パッケージのイラストは上田毅八郎氏、金型代 150 万円を含む初期費用 500 万円、背水の陣であったと義雄氏は回想しています。

このキットは思ったほど売れませんでした。タミヤの発売直前に、ニチモが同じ「戦艦大和」を発売します。ニチモは先に「伊号潜水艦」をヒットさせプラモデルに関しては一日の長があり、しかも定価がタミヤの想定額 500 円より安い 350 円であったため、急遽 300 円に値を落とし販売しましたが、艦底が赤色にモールドされた二色成形のニチモに対して、ねずみ色一色のタミヤでは見た目の勝負は一目瞭然だったようです。

プラモデルに対して悲観的になりつつあった義雄社長に対し、俊作現社長は次のキット開発を強く主張し、タミヤが最も得意とする戦車の開発を推進したのです。

昭和 36 年 12 月 30 日、初期タミヤの代表作である「パンサータンク」が発売されました。

が、やはり同時期にニチモがパットン戦車を、三和がシャーマン戦車を発売、評判を呼んでいました。タミヤはドイツ戦車に的を絞り、販売に際しても、俊作氏自らが、製品を積んだトラックを運転して浅草の間屋に納品して回ったといえます。

箱絵を当時流行挿絵画家小松崎茂氏が担当、布団の山、枕の要塞だって苦にせずよく走りました。こんなプラモデルは初めてでした。当然のごとく「パンサータンク」は大ヒットとなり、子どもたちは「動く」模型を渴望していたのです。

昭和 35 年という年は、ニチモ、イマイ、タミヤという後年業界の動向を左右するメーカーがプラモデル産業に本格的に参入した、黄金時代の幕開けだったのです。

「こんなの模型じゃない」と初めて外国製のキットを見たハセガワの長谷川勝重社長は思ったそうで

す。当時の長谷川製作所がプラモデルを最初に作ったのは昭和 36 年の春のことで、いずれも「グライダー」を作りました。なぜグライダーにしたかという金型代が少なくて済んだからでした。東京でプラモデルが活況を呈していましたから、なんとかしようと思うものの、知識も技術もない、という状況下でとりあえず作ったといえます。

当時長谷川製作所は、木工で十分利益がありましたから、プラモデルへの転身が遅れたようです。そのハセガワが社運を賭けて作ったのが、1/450「戦艦大和」でした。37年6月のことです。この「大和」は全長 60 センチ近い大物で、モーターで走りました。設計、木型作りのノウハウはありましたが、金型は東京池袋の金型屋に外注し、金型代も高く、これが売れなければ会社が危ないという危機感が頑張りに繋がったようです。

800 円という当時としては高価なものがとにかく売れました。この年だけで 15 万個くらい売り、最終的に数十万個売ったベストセラーになりました。このキットの成功で、ハセガワは本格的にプラモデルに参入しました。

*平成 20 年 6 月 1 日 会長に就任